

試聴会・訪問記掲載

シマムセンオーディオ試聴会 (2017.5.20)

—テクニクス新製品試聴会—

1. はじめに

シマムセン CYMA で開催されたテクニクス新製品の試聴会に行ってきました。

2. 使用機器



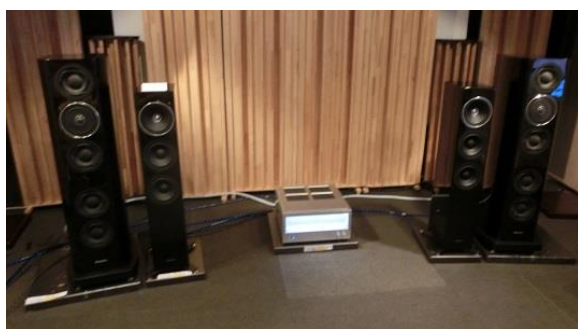
SB-G90



SU-G700



SL-1200GR



当日のセッティング

3. 試聴会の進行

試聴に先立ち、機器の概要説明があり、試聴の合間にも、パネル、カットコアモデル、動画などを交えて、機器の設計思想、構造、材質、製造プロセスなどの詳しい説明がありました。詳しいことは、下記テクニクスのサイトを参照願います。

<http://jp.technics.com/products/g90/>

<http://jp.technics.com/products/g700/>

<http://jp.technics.com/products/1200gr/>

最初に、同社のミュージックサーバーから女性ボーカルの 96KHz24bit の FLAC 音源がかかりましたが、声は素直な感じでしたが、バックの弦が固めで、低音がこもりがちになるのが気になりました。次に、CD からリップングしたイーグルスがかかりましたらクリアーですっきりした音でした。

ここで、SU-G700 に搭載された LAPC (Load Adaptive Phase Calibration) 機能についてデモがありました。詳しいことは、下記のホームページからの引用文を参照願います。

「スピーカーのインピーダンスは一定ではなく周波数ごとに変化するので、パワーアンプにはその特性に影響されることなく、安定してスピーカーを駆動することが求められます。しかし、従来のデジタルアンプでは、出力段のローパスフィルターを介してスピーカーに接続されていたため、スピーカーのインピーダンス特性の影響をより強く受けていました。また、従来のアナログアンプでは、負帰還により振幅特性を改善していましたが、位相特性まで改善することはできませんでした。そこで、スピーカーを接続した状態でアンプ出力の周波数振幅位相を測定し、デジタル信号処理により理想的なインパルス応答に補正するスピーカー負荷適応アルゴリズム「LAPC」を開発。この手法により、これまでのアンプでは実現できなかった振幅と位相の周波数特性の平坦化を可能にし、空間表現に優れた音の再生を実現しました。SU-G700 とスピーカーを接続した状態で、リモコンの LAPC ボタンを操作することで測定を開始、スピーカーからテスト信号が再生される際のアンプの出力信号を解析することで振幅と位相の平坦化を行います。初回のセッティング時はもちろん、スピーカーのエイジングが進んだタイミングで LAPC を再設定することで、常に最適なアンプ駆動を実現します。」

続いて、ベートーベンの「皇帝」とロックがかかりましたが、「皇帝」では、明晰ではあるものの、独特のキラキラ感があり、オーケストラの合奏ではもっと湿度感が欲しい印象でした。一方、ロックの方は、このような音色がプラス方向に働いていたように感じました。

以後は SL-1200GR によるアナログの試聴になりましたが、アナログは MM 入力対応のみですので、オルトフォンのカートリッジとフォノイコライザーを組み合わせると試聴が始まりました。

最初に、ソニーロリンズ、ついで YMO がかりましたが、非常に明晰でクリアーな印象でしたが、ややクールな音のように感じました。

次のステレオサウンド発売のミキサーズ・ラボのシェエラザードは期待がかかりましたが、音の明晰さはあるものの、弦や木管の質感、オーケストレーションの立体感な

どが、同じ曲の演奏会や過去のアナログ盤、アナログマスターからの CD の印象に比べて平凡な印象でした。

ついで、よくデモでかかる石川さゆりを聴いてから、SL-1200GR と先行発売の上級機種 SL-1200G の比較を、アンプとスピーカーをリファレンスシリーズの機種に替えて行うことになりました。音源は五輪まゆみでしたが、やはり SL-1200G が、声の質感、バックのディテールの再現などで優れて聴こえましたが、価格を考えると SL-1200GR は健闘していると思います。最後は、SL-1200G による中島みゆきで締めくくられましたが、リファレンスシリーズを[テクニクスリスニングルーム試聴記\(2017.1.18\)](#)で報告した印象に比べて、今回は試聴室の関係か、音場矯正のアクセサリーを多用しているせいか、設計のしっかりされたテクニクスリスニングルームよりしっくりしない印象でした。

4. 考察

今回の SL-1200GR のデモとテクニクスリスニングルームで聴いた印象から、復活した SL-1200 シリーズはコストパフォーマンスに優れた製品は間違いないと思います。しかしながら、アナログをデジタルアンプで聴くということ自体が、情緒的に抵抗感がありますし、実際にデモでのクラシックは不満が残りました。

[河口無線ハイファイリティ試聴会報告\(2015.8.1\)](#)で報告した、トリノフ・オーディオ (TRINNOV AUDIO) のサウンド・オブチマイザーの [ST2-HiFi](#)、あるいはサウンド・オブチマイザー機能を内蔵したプリアンプ [AMETHYST](#) では、マイクで拾って F 特や位相補正を自動的に行っており、拙宅で、以前に SH-8075 と SH-8000 でマニュアル的に F 特補正を行った経験からも、LAPC はアンプからスピーカー端子に届くまでの補正であり、その後のネットワークや音場の補正には働いていないので、果たしてそれで十分かという疑問が残ります。CYMA とテクニクスリスニングルームの印象にギャップがあったことからそのような感じましたし、また音場の位相補正が必要のない音楽ジャンルの音源再生では、気になりませんでしたので、後段のネットワークや音場の補正にも踏み込むべきではないかという印象でした。

以上